「目も見えなくなって、耳も聞こえなくなって大変だ」

九十五才のひいおばあちゃんが言った。話しかけると、何回も聞き返されたり、変な言葉で伝わったりすることもある。目がみえづらいひいおばあちゃんに、僕が「これはきなのおもちだよ」と話すと、「大根か、なんだこれ、きのこか、何って言ってるのかわからないな」と言うから、また「きなこのおもちだよ」と伝えると、「ああ、きなこのおもちか」とひいおばあちゃんは大笑い。だから家族も大笑い。ひいおばあちゃんの周りにはいつも笑顔がいっぱいだ。

足が曲がって、何かにつかまらないと安全に歩けないひいおばあちゃんだけど、工夫の名人で、歩く場所につかまりやすいものを置いてなんだか上手に家の中を一人で歩いている。でも、つかまるところがないときには、誰かと手をつないで歩いている。もしかしたら、介護の花子さんの施設にもこんなおばあ

ちゃんがいるかもしれないと思った。

介護と聞くと、僕は、なんだか難しそう、大変なこと、特別なことのように思っていた。でも、この本を読んで、普段の生活の中にも介護が当たり前にあるのだなと知った。でも、僕はこの介護という言葉がどうしても好きではない。何かが苦手だったり、困ったりしたときは、みんな助け合って生きている。赤ちゃんだって、ミルクをもらったり、うんちをしたおむつを替えてもらったりする。それなのに、年をとった人のお手伝いや、手助けは介護という難しい言葉でまとめられてしまう。僕はどうしても、この言葉に違和感がある。

年をたくさんとった人にも、介護なんて難しい言葉ではなく、生きる手助けを自然にできる世界が本当は一番素敵なのだと思う。

花子さんは、たくさんの人と関わる中で、自分の思いや考えが成長していった。でも、もしかしたら花子さんの一番身近に、介護の温かさ、一番大切なこと、目指すべき姿があ

ったのではないかと僕は思う。それは祖父が「大」をもらしてしまった場面だ。花子さんのお母さんは、「お父っさ、お腹スッキリしたに、よかったね。」と声をかけて、すぐに着替えをした。この言葉とお母さんの姿が、祖父を大切に思う気持ちにあふれていて、僕の心は温かくなった。これが介護と言われることなら少しだけ温かい言葉にも思えてくる。

人が、自分らしく生きることができるように手助けすることが、介護だと僕は考える。でもそのためには、周りの人達が、その人のことを心から大切に思う気持ちがなければ、介護は難しくて、マイナスなイメージだけになってしまうこともあると思う。大変さはきっとある。でも、その時間もその人と過ごすかけがえのない時間なのだ。大切な人と一緒に過ごせる今を大切に僕も毎日を生きていこう。介護という言葉は好きではないけれど、これからもひいおばあちゃんが必要な手助けをできるように、たくさんそばにいたい。